

教師教育者を目指す大学院生に必要な授業実践の模索

久恒 拓也（広島大学大学院・院生）

本報告の目的と課題設定

2012年8月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の中で、「教職課程担当教員の在り方」という項目が設けられたのは記憶に新しい。「大学における教員養成」の実際が、授業者である大学教員によって大きく方向づけられていることは自明と思われるにも関わらず、政策レベル⁽¹⁾でも学術レベル⁽²⁾でも、その担当教員の養成に関して取り上げられたのは近年になってからである。

上記答申において言及された、教育研究の充実及び教職課程の質の向上を目的とした「大学教員の養成システムを整備していくこと」の必要性に鑑みても、広島大学大学院が2007年から行なっている教職課程担当教員養成プログラム⁽³⁾（博士課程後期院生を対象とした3年間のプログラム。以下、教職Pと略記）は、「先生の先生」の養成を目指した先駆的な取り組みであるといえる。教職Pにおける山場は3回の教壇実習（教職Pでの呼称は「教職授業プラクティカム」、プログラム履修2年目の前期と後期に広島大学内で1回ずつ、3年目の前期に他大学で1回行なう）であり、それらのリフレクションを含め履修期間に学び得たことから Teaching philosophy・自己評価を「教職教育ポートフォリオ」にまとめ、修了となる。

同ポートフォリオは、3年間の学修成果の集大成であり、教授哲学を思考し続ける装置として重要といえる。しかし一方で、実際の授業における「実践的力量的体系的把握が明確な形でリストにできてこなかった」⁽⁴⁾という課題が指摘されており、それに対応する機能を持つ仕掛けは現状存在しない。実際、プログラムの渦中にある筆者は、どのような成長・変化を描くべきなのか、自身の授業の力量がどのような位置にあるのか手探りの状態にあるため、授業に臨むにあたっての指針とそれを体現する実践にどのような方向性を持たせるべきかを決めかねているという問題がある。要するに、3年間を振り返っての評価ではなく、手近な道標を欲していることになる。

教職Pは教師教育者養成という部分を除いて考えると、いわゆるFDの前段階にあたるPFF（Preparing Future Faculty）の一つである。日本におけるPFFの歴史は浅く⁽⁵⁾、研究大学を中心に取り組みが広がりつつあるものの、プログラム対象者がPFFを通じてどのような力量形成の変容をみせるのか検討した事例は少ない。この文脈に乗せれば、教職P履修者がプログラムを通じてどのように教職課程担当教員としての力量が形成されるのか分析し、その授業実践の方向性を考察することは、高等教育研究上も有益といえよう。

上述の研究事例としては、溝上ら⁽⁶⁾による、京都大学文学研究科プレFD研修プロジェクト⁽⁷⁾の参加者3名の振り返りをまとめたもの、境ら⁽⁸⁾による教職P修了者（現職大学教員）2名に対するインタビュー記録を分析・考察したものがある。前者によると、授業のやり方に関する「引き出し」を増やせたことこそが得られた最大の成果であるとの振り返りや、相互研修型であることによって、スキルというよりはモノの見方や考え方が身につくことなどが成長または成長促進要因として挙げられている。後者は修了者の経験談から、教職Pの独自性として、長い時間をかけて、授業について観る力や問う力、学ぶ力を向上させていくことが示されている。ただ、実践的力量的に関して修了者の一人は「授業うまくなったとか、そういうことはないです。ないと思います。…（引用者中略）…教職Pでつくられた態度によって、いろんな知見を学ぶようになったのはたしかで、それを取り入れる時の視点が豊かになった気はする。」と述べており⁽⁹⁾、履修者の内省に依拠する成長が過度に重視されている教職Pの課題の片鱗をみることが出来る。これらの研究は、プロジェクト（プログラム）を修了してからの振り返りをもとに、集大成としての成長を抽出している。しかし、段階的

に達成できたこと（あるいはすべきこと）が何であるかというような、変容モデルが描かれているわけではないし、そうした目的でなされてもいない。

そこで本報告では、学内におけるプラクティカムを2回行った教職P履修者A（報告者のことである）の授業実践とそれに関わる周辺資料をもとに、Aにどのような力量形成と課題が見出せるのか分析・考察することを通じて、教師教育者を目指す大学院生が授業を行なう際にどのような段階を経ているのか、またどのような方向性を目指すべきなのか提示することを目的とする。

分析資料及び分析方法・視角

（1）分析資料について

資料は3種に大別できる。①2回の授業の内容を映像・音声ともに記録した電子データや、授業用配付資料といった授業内容そのものに関わるもの、②プラクティカムの事前・事後検討会の配付資料、音声記録等の授業の計画・振り返りに関するもの、③プラクティカム実施日の授業出席者（以下、受講生）による授業評価・感想等のコメント⁽¹⁰⁾、である。詳細については本節末尾の一覧を参照いただきたい。

履修2年目のA（博士課程後期2年・教育史専攻）は、2014年度にプラクティカムを2回行った⁽¹¹⁾。各授業の概要は表1に示した通りである。補足情報を2つ加えておく。1つは、Aが両授業ともティーチング・アシスタント（以下TA）として雇用されていることである。これは、教職Pによって推奨されている措置である。また、受講生がプログラム履修者を認知しやすいというメリットがある。もう1つは、「教育の思想と原理」は担当教員1名が受け持ち、「教育と社会・制度」は前半8回・後半7回で担当教員が異なっていることである。

（2）分析方法・視角について

（1）の資料をもとに、①授業の技術・方法、内容・構成等についてAにどのような成長を見出せる（あるいは見出せない）のかを分析し、課題がどこにあるかを考察した。そして、②Aは自身の変化をどうみているのか、③教壇実習を受けた学生が抱いた大学院生の教壇実習に対する見方はどのようなものであるか、検討する。本報告においては、授業をする前の時点、授業時、授業後検討会の時点、両方の授業を終えての時点といった様々な時間軸に立って作成されたAの記録・資料を精査し、Aの変化を忠実に抽出することに努めた。

【分析に使用した資料一覧】

- 資料1：プラクティカムIの事前検討会配布資料（講義計画、指導案などを含む）
- 資料2：プラクティカムIの撮影データをもとに作成した授業の進行過程
- 資料3：プラクティカムIの事後検討会配布資料（授業者による振り返り）
- 資料4：プラクティカムIの受講生による授業評価コメント（158名分）
- 資料5：プラクティカムIIの指導案（骨子）（当日の観察者に向けた配付資料の一つ）
- 資料6：プラクティカムIIの撮影データをもとに作成した実際の進行過程
- 資料7：プラクティカムIIの事後検討会音声記録（およそ45分間）
- 資料8：プラクティカムIIの受講生による授業評価コメント（155名分）
- 資料9：プラクティカムII 授業者による振り返り（2015年1月14日作成）
- 資料10：二つの教壇実習を終えて（授業者による振り返り、2015年2月1日作成）
- 資料11：プラクティカムIで使用したPPTスライド
- 資料12：プラクティカムIIで使用したPPTスライド
- 資料13：プラクティカムIの受講生用配付資料（A3片面印刷×3、A4片面×1）
- 資料14：プラクティカムIIの受講生用配付資料（A3両面印刷×1、B5両面×1）

分析・考察①—見出せるAの成長と課題—

プラクティカムⅠとⅡ（以下、特に断らない限り、ⅠはプラクティカムⅠを、ⅡはプラクティカムⅡをそれぞれ示すこととする）とを比較あるいは通して見た場合、Aは何ができるようになっていくか、何をしようとしたか、次に掲げた項目ごとに検討した。

表1 教壇実習の概要

	プラクティカムⅠ	プラクティカムⅡ
授業名	教育の思想と原理	教育と社会・制度
実施日	2014年7月14日	2014年12月22日
本時の目標	現在の教員養成制度がどのような経緯の上に成り立っているのかを概観し、戦前から戦後への教員養成の変化を巨視的にとらえるきっかけを得る。	広島大学を出発点として、近代学校制度を理解する。日本の大学の成立と性格、その意義を考える。
位置づけ	教職専門科目（必修）。教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想。	教職専門科目（必修）。教育に関する社会的、制度的又は経営的事項。
トピック	日本における教員養成の歴史と課題	日本における学校の成立と展開 —広島大学を出発点として—
受講生	158名（主に教育学部2回生）※	155名（主に教育学部2回生）※
シラバスにおける本来の授業計画	<p>第1回 教育とはなにか(授業とレポート課題についての説明)</p> <p>第2回 教育と人間1 人間にとつての教育の必要性</p> <p>第3回 教育と人間2 教育の対象としての「子ども」</p> <p>第4回 教育と人間3 「教える」ということ</p> <p>第5回 学校教育の歴史1 近代公教育の理念</p> <p>第6回 学校教育の歴史2 天皇制国家と教育(教育勅語の理念)</p> <p>第7回 学校教育の歴史3 植民地における教育</p> <p>第8回 学校教育の歴史4 戦後教育改革とその理念</p> <p>第9回 学校教育の歴史5 経済成長と教育問題</p> <p>第10回 教育とはなにか1 受講生による報告会1</p> <p>第11回 教育とはなにか2 受講生による報告会2</p> <p>第12回 教育とはなにか3 受講生による報告会3</p> <p>第13回 教育とはなにか4 受講生による報告会4</p> <p>第14回 日本における教員養成の歴史と課題</p> <p>第15回 総括</p> <p>学校教育の歴史については、第5～9回の毎回小試験をおこなったうえで、第15回に総括する。「教育とはなにか」について追究するための具体的なテーマを設定し、レポートを作成したうえで、それにもとづき第10～13回に小グループでの報告会をおこなう。</p>	<p>第1回 オリエンテーション 本講義の目的・方法や、単位認定のために最低限必要な条件等を明示し、受講学生の主体的受講態度の喚起を図る。</p> <p>第2回 教育法制の現状と課題 公教育制度の基本原則である「教育を受ける権利と機会均等」および「義務性・無償制・中立性」について基礎的理解を図る。</p> <p>第3回 教育行政の現状と課題 教育行政組織の概要と機能および現状と課題について基礎的理解を図る。</p> <p>第4回 学校経営の現状と課題 学校の公共性や自主性さらには学校経営組織の概要と機能、今後の課題等について基礎的理解を図る。</p> <p>第5回 教育課程行政の現状と課題 公教育制度上における教育課程の意義とその法制について概説した上で、教育課程と密接な関係にある教科書及び教材に関する制度や課題について基礎的理解を図る。</p> <p>第6回 教職員管理の現状と課題 教職員の資格と任用、勤務、研修などの諸制度に関する基礎的理解を図るとともに、教職員の身分と分限さらには懲戒に関する法制と近年の動向を概説しつつ、教職員の高い倫理観や使命感の必要性について自覚を促す。</p> <p>第7回 児童・生徒管理の現状と課題 児童・生徒の就学と在学管理、さらには生徒懲戒の制度に関する基礎的理解を図る。</p> <p>第8回 筆記試験 上記講義内容に関する修得状況を確認するために、筆記試験を行う。</p> <p>第9回 欧米における学校の成立と機能</p> <p>第10回 日本における学校の成立と展開</p> <p>第11回 教育問題の戦後社会史</p> <p>第12回 教育改革の行方</p> <p>第13回 学校の社会的機能 — 社会化・正統化</p> <p>第14回 学校の社会的機能 — 社会的選抜</p> <p>第15回 まとめ</p>

※受講生(当日出席者)の大半を占める2回生はほぼ同一の学生群である(前・後期を通じてAのプラクティカムを受講しているのは109名)。教員免許状取得は卒業要件に入っていないコースに属する。両授業とも180名近くが履修登録しており、プラクティカム当日の出席率はおよそ85%である。

(1) 教授技術・方法

Aは両方の授業を講義形式で行なっており、進行にはパワーポイントのスライド(教室前方のスクリーンにプロジェクターで投影)を用いている。スライドのハンドアウトは受講生には配付していない。外面的なことを述べるならば、Ⅰのスライドは紺色の地に明朝体の白字をベースにしているのに対し、Ⅱのそれは、白地にゴシック体の黒字を基調としている。Ⅰに対する受講生の「スライドの配色及び文字サイズをわかりやすくしてほしいと感じました。」というコメントが多数あったこと(同様の内容を記入した者28名)、「配色センスが欠けていた」という授業後の振り返りから、改善に取り組んだようである。

また、授業の注意事項や表題を示した部分を除いての合計枚数は、Ⅰの24枚からⅡの12枚へと半減している。これもスライドの切り替わりが早いという受講生からの指摘(同様の記述13名)を受けての対応と思われる。しかし、Ⅱにおけるスライドの形式が簡潔になった一方で、「文章で説

明するところは、もっと字を書いてもらえないと、内容の理解が少し難しかった。」や「(スライドの) 矢印が何を示すのかわからない。」というような、スライド自体がわかりにくいという指摘もあるため、Aに、自身の指導技量に合ったスライドを作成する能力が十分備わっていないことがうかがえる。

(2) 授業の構成

I、IIの授業の構成はともに、授業者の講義(20数分)、大きな発問をし、回答を教室全体で共有する時間、講義(20数分、Iはワークシート作業をさせる時間、IIはプロジェクターに資料を投影して見せる時間が含まれる)、再度大きい発問と回答の時間、講義(15分~20数分)という、90分を三つに区切るような組み立てをしている。なぜそのようなスタイルを共通して採っているのか、資料からは明らかにはできなかった。現在の時点からみれば、Aは自然と自分の授業スタイルを構築しようとしていたとも考えられる。

二つの大きな発問は、受講生の集中力を考慮しての、息抜きの要素の強い存在となっているようだ。IIの事後検討会においてAが「クッションの時間、ワntenポ少しおく時間があるといいかなと思って」問を設けたと述べていることがそれを示唆している。問は、Iでは回答者がどのような答えを出してもよい選択式で、その後の展開に直接的な影響が少なくなるよう設計されているのに対し、IIでは記述させて回答を数名から拾い上げる方式であり、授業者の対応次第ではその後の展開に大きく響くことになる。Iの振り返り時、受講生に回答の理由を訊きたかったが「学生から意見を引き出せそうな雰囲気になっていたかわからない(Iの振り返り)」ため断念したことと比べると、IIでは受講生個別の意見をとりあげる挑戦はなされているといえる。

ただ、問い方や、受講生の問に対する反応を十分練っておくことが課題として残った。IIの発問の片方は、内容を一度しか説明していなかったため、受講生の中に聞き漏らしていた者や、一度では意味が伝わらず、何を答えればよいのかわからなかった者が多くいた。授業提供教員Cからは、「学生は一度伝えただけでは聞いてなくて…しつこく言わないと」という指摘を受けた。IIの実施後、改めてIの撮影記録をみると、発問の際に問いを2、3度繰り返して周知させていた。Iの振り返りには問いの発し方についての記述は一切なく、IIでこうしたアクシデントを認識するまで、大切なポイントを逃していたことになる。二つ目の発問は、問いが抽象的すぎたのか、「考えにくかった」というコメントや、事前に想定していた回答例よりも多くの種の回答を受講生が記述していたことから、Aの学生の思考力に対する理解が十分でない点を指摘できる。こうした自身の力量を相対化して、なんとなく行なっていたことへの反省やその重要性に気付くことは、プラクティカムを通じた履修者の成長といえるのではないかと。

(3) 授業の内容

IとIIは、「本時の目標」は異なるが、Aは自身の研究テーマである教員養成(史)を共通の題材として扱っている。これには大きく2つの利点がある。1つは自身の研究内容を援用して授業を構築する力を養う訓練になるということ。これにはAの研究が戦後の教員養成史を主題にしている背景がある。もう1つは、博士論文執筆とプラクティカムに関する取り組みが両立しやすいということである⁽¹²⁾。後者はより詳しく述べておく。基本的に博士号取得が教職P履修者にとっての最優先事項である現状において、プラクティカムで門外漢の領域を扱うことは、労力の面からいって負荷が過大であるといえる。したがって、普段の研究内容に近い領域をベースに実習を行なうことには、授業の構想をするにあたって、知識が付け焼き刃にならず且つ構想に注ぐ時間を抑えることができる利点がある。

表2 受講者のコメントの比較

プラクティカムⅠ	プラクティカムⅡ
【技術・方法に関すること】※各項目、上段は良かった点、下段は改善を要する点。	
画用紙を使った取り組みなど、授業内容をリアルに感じられる機会になってよかったです。	資料、スライドの見やすさ、ネットなどを使った教材、前より単調さがなくなったと思う。
スライドがバックが暗で文字が白、たまに色つきだったのですが、少し見えづらかったです。スライドに動きがあってよかったのですがあまり早すぎないように注意した方がいいと思いました。	Q2は考え方を揺さぶられる問いで考えさせられた。良問だったと思う。パワーポイントがすっきりして見やすかったが、文章で説明するところは、もっと字を書いたら見やすい、内容の理解が少し難しかった。Q1を書く際、何と書けば良いのが学生に伝わっていなかった。
【授業参加に関すること】	
カラーボードを使って全員意見を集めるという斬新な発想に感銘を受けた。	複数の人を指名し意見を述べさせたこと。
カラーボードよりも、普通に手を挙げて答えさせてもよかったのでは？	話し合う(意見を交換する)機会を設けるべき。
【内容・構成に関すること】	
最後のまとめのスライドを見ると、今日一時間で学習したエッセンスが簡潔に示されており、学習したことを整理するのに役立った。	身近なこの広島大学から入ったことで、内容にとつきやすかったです。ご自身の研究テーマも取り入れながらの授業は興味深くうかがうことができた。
文書的な資料が多くて、とても参考になったが、90分では理解しきれない情報量だったかなと思います。比較をするような授業方法で、両者の差異がとて分りやすかったと思います。さらにディベート等もこの内容だったら白熱するものが行なわれると思うので、してみたいなと思いました。	広島大学からみていくのかと思ったのですが、東北大学の方から大学の成立と展開をみていったのがわかりにくくさせるように思いました。今日の内容のテーマが明確に示されていなかった。(授業開始時)

表3 履修者Aの振り返りの比較

プラクティカムⅠ(資料3から)	プラクティカムⅡ(資料7から)
授業のねらい(目標)の達成度は6割程度ではないか。 PPTスライドの配色センスが欠けていた。 スライドの表示時間と進捗との兼ね合いに対する理解の不足があった。 配布資料で扱う情報量に対する考え方が明確でない。 学生から意見を引き出せそうな雰囲気になっていかなかった。 (扱う)事柄に対する疑問点を授業者がどの程度勝手に挙げてよいか。	多様なことを説明したので、授業の目標がぼやけた。 説明に必要な分量を超えてしゃべり過ぎてしまう部分がある。 配布資料を使い切ることができた。 授業全体で扱う情報量が多くなり、より簡潔にしなければならぬ。 (授業を構成する上で)自分がスムーズだと思った順番が受講者側にとってはそう働いていない。

AはⅠ・Ⅱを通し、自身の研究内容を一部授業で扱うということに関して、かなり手馴れてきたようである。Ⅱの振り返りによると、授業計画の構想にあたっては、学術誌への投稿締め切りが迫る時期と重なったことによる準備不足を指摘しているが、既成のテキストを用いることもなく、教員養成(史)を基軸にした内容で構成することはできている。

反対に欠点としては、授業内容が概論としては専門的になりすぎたり、90分の中に収めるのが困難になったりすることが挙げられる(Ⅰでは、「おもしろかったけど、内容が少し難しかった」という感想が見受けられた)。分析・考察②でも触れるが、Aの授業内容は教職志望者に特に必要とされる学校教育・子どもに関する知識というよりは、教員養成という大きな枠組みそのものを扱う。ゆえに教職を希望するかどうかわからない学生や迷っている学生の判断材料としては有用かもしれないが、教職志望度のある程度高い者には、もっと他に学びたいことがあると思われても仕方ないところもある。研究として重要だと授業者が思う内容を、学ぶ側にとっての重要性の観点から再構築することについては、改善の余地を残している。

分析・考察②—Aは自身の教壇実習をどうとらえたか？—

AはプラクティカムⅡを実施してから6週間ほど後に、二つの教壇実習を終えて感じたことを文書の形で残している(資料10)。その先頭には、プラクティカムについて「ひとまずやってみた」という感が非常に強い」という記述がみられ、両実習の経験値としての意味合いの大きさをうかがわせる。そうした記述をした背景には、「プラクティカムは90分に教えたいこと、学んでほしいことを凝縮して詰め込むことになるため、授業に不慣れた実習生の身としては、どれほどの分量を扱うのが適当であるかを理解して臨むのが困難であるという問題を抱えてしまう」という授業で扱う情報量に対する認識不足と、「学び手が…(筆者中略)…伝達する情報をどのようにとらえ、どの程度咀嚼できるのかを把握する場面が少ない」こと、つまり受講生の理解力に対する理解の浅さが挙げられている。

類似した自己評価である学習者・大学生に対する理解不足は別の箇所にも現われる。「問題として大きなものは、大学生の理解力・思考力に対する過度な期待を抱いていること」であり、考えさせるには準備が必要であることを、Ⅱ以降強く意識しているようである。「学生自体に対する眼を養っておく必要は大であろう」というのが通底する課題といえる。

Aの重要な内面的変化としては、自分の授業内容が教師教育の一環として適切であるかどうか批判的になっていることが挙げられる。Aは「教員志望者は幅広い視野を持つべき」で、彼らがおかれている養成制度を俯瞰するという授業内容(Ⅰ)は、「総合的な教員理解の一環」であるという必要性を主張しつつも、「教員志望者は養成の制度や枠組みがどうなるかが従わざるを得ない立場に

将来おかれるため」、そのような内容が彼らにとって「おもしろい」以上のものを与えるかどうか疑問視している。これは、教師教育としての妥当性というフィルターを通して授業内容を考えることを意味しており、広い意味での「教員養成担当者としての自覚」⁽¹³⁾の芽生えを示唆している。問題は、そこに到達するまでの道程が一大学院生に任せられていることにある。

その他 A は、全授業日程におけるプラクティカムのタイミングによって学習者側に与える印象が異なる可能性や、自身がこのままプログラムを終了したとして、身につく力量の射程が教職課程担当教員としては短いと予想されることへの危惧にも触れている。

どうやら A の場合、教壇実習から時間をおくと、授業をする上での自身の弱点とその原因に鋭敏になり、さらには授業内容、プログラム自体への懐疑的な眼差しを強く持つ状態に至っている。このことから、2 回のプラクティカム経験は、自身の強みを発見するというよりは、改善点をより深く探っていく方向に進んでいく役割を果たしたといえる。

分析・考察③—大学院生の授業という側面からみた A の課題—

学生側から見て、プラクティカムがどのような存在として認知され、どのようなことを期待されているのか知るとも、教職 P 履修者が授業実践を模索する際に重要な基準の一つであろう。そこで、プラクティカムⅡの授業感想・評価シートに、受講生にとって大学院生による教職課程の教壇実習が有意義であると思うかどうかとその理由の記述を求める⁽¹⁴⁾項目を設けた。A の授業実践の事象のみからでは、授業をする側に沿った課題しか見えてこないため、学習者側からの反応をみて、A の課題の客観視や、教壇実習に臨む中で目指すべき方向性をどう設定すべきなのか知りたかったというのがこの問いを設定した当初の意図である。

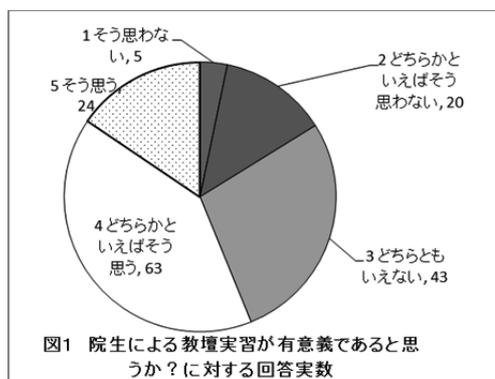


図1 院生による教壇実習が有意義であると思うか？に対する回答実数

上記項目に対する回答を集計したグラフが図 1 である。それによると、受講生の 56%にあたる 87 人は大学院生の教壇実習という存在を肯定的にとらえていることがわかった。なぜそのような思うかという問いに対する回答のうち、同様かつ多数であったのは、「授業の水準を担保してほしいが、大学院生の実習する機会も大事」という一長一短の指摘である。選択肢 3 「どちらともいえない」を選んだ者にその趣旨のコメントが多い。彼らの中には A の授業そのものについての評価を加味せず、「大学院生だからこそこできる授業内容ならば有意義だと思う」と述べる者もいた。

選択肢 4 や 5 を選んだ者の回答では、「将来自分たちの行なう教育実習の手本になる」あるいは、単純に「大学院生の授業というのは新鮮で」「刺激になる」ことや「年齢が近いので親近感がわく」との利点を述べたものが目立った。また少数ではあるが、「大学院生の研究内容が学べる」、「研究している内容がよくても、それを上手くアウトプットできないと意味がないし、そのための経験の場として必要だと思います」といった意見も見られた。

否定的な回答（1、2 の選択）をした者の意見には、「大学生も有意義かと言われたら、そうではない気がする」「本授業との内容がずれる。内容の定着が弱くなる」というような、受講生側のメリットの少なさと、授業者の技量不足により授業の質が落ちることが含まれていた。さらには、教職課程の授業に院生が関与することをよしとしない見方があることもわかった（「教職課程は、教職の内容であるため、できるだけ体験を得た人が授業を行ってくださった方がわかりやすいし、入りこみやすい」「教養教育科目でした方がよいのではないかと思います。教職関係は教授から学びたいです」）。

長所を伸ばすのであれば、プラクティカムが学生に浸透するような工夫と、履修者の院生としての授業ならではの取り組みが求められるし、短所を補うのであれば、プラクティカムの他にも授業実践の訓練をプログラム化することが必要となるのではないだろうか。現状としては、3 を回答し

た受講生を念頭に置いた対応をすること、すなわち、授業の質の担保を最優先としつつ、通常の授業担当者とは異なる大学院生としての視点を強く意識した授業を目指すことが方向性として妥当と思われる。

まとめ

本報告では、教職 P 履修者 A が 2 回の教壇実習を終えて、どのような力量形成と課題が見出せるか検討した。これらをもとに、教師教育者を目指す大学院生の授業実践上の成長モデルの一例を描くとともに、彼ら（教職 P 履修者）にどういった目標や、乗り越えるべき課題が与えられるべきなのかを示したい。

1 授業スタイルの構築と定着

A は、I の実施とその振り返りの行程において、行なった授業実践の意味や教師教育としての妥当性というものについてはさほど批判的ではない。1 回目で主に意識的に見ているのは、90 分という時間に入る授業内容であったかどうかや、受講生に対する教授方法・技術がうまく機能したかどうかという点である。教壇実習 1 回目に与えられるべき課題は、そうした小手先の事項も含めた自分の授業スタイルの構築を目指すことであり、A は意識的でないにせよ、その部分で成長をみせた。

2 自身の弱点把握、教師教育との親和性の改善

次に進む段階として、自身の授業の相対化ということが挙げられる。I も II も、経験値としての重要性は高いといえるのだが、II を行なうことによって、とり入れた動機の曖昧だった実践の重要性や課題を認識することができるようになる。A の事例を見る限り、教職 P では、自分のできないこと（弱点）を認識・整理し、その根源を探ろうとする方へ舵をきったといえる。A は実習を両方終えてから、教師教育としての適切性を、授業分析の際の鍵概念としているわけだが、教師教育者を目指す大学院生総体に向けた課題としては、2 回目の実習に入る際に、自身の授業計画をその適切性フィルターに通すことが必要と思われる。A はそうした反省こそ入念にしているが、それに対応した改善を「実践」できてはいないからである。3 度目の実習でどのようにそれを行なうかが、A の課題であろう。

3 継続的な学習者理解の試み

これは、1 や 2 の前提として必要と思われる取組として提示したい。A の振り返りにおいて述べられた、学習者の理解力に対する理解の浅さは、やはり授業者として致命的な弱点である。実際に授業をしてみれば、実感を得られないので難しい課題ではあるが、教える対象、つまり「教職課程をとる大学生」がどのような存在であるか、また彼らはどのような成長過程の途中にいるのか、というような点についての調査・研究、あるいは学習を机上レベルでしておくことも、教壇実習が有意義なものとなる上で重要と考える。

表4 Aの力量形成とその過程

時点(図2と対応)	Aの力量形成		Aの(授業実践の)課題	
	意図せず行なっていたこと	意図して行なっていたこと	意識された課題	隠れていた課題
① I の前				
プラクティク I	自分の授業スタイルの模索 発問の説明を丁寧に行なう	受講生の参加場面設定	時間配分	教師教育としての適切性
② I の直後		足りない技量の整理	授業で扱う情報量の過多 PPTの視覚的工夫の必要	
③ II の前				
プラクティク II	自分の授業スタイルの構築	受講生の参加場面設定 PPTの量・配色・文字を工夫		
④ II の後		I との比較		教師教育としての適切性
⑤ II から6週間後	自分の授業の相対化 教師教育者意識の芽生え 教職Pへの懐疑的眼差し形成	プラクティク時よりも包括的な振り返り	教師教育としての適切性 プラクティクの経験値としての重要性	
現在		授業の綿密な分析	授業実践への知識不足	

註

- (1) 教育職員養成審議会『養成と採用・研修と連携の円滑化について』（第3次答申）、1999年。
- (2) 高野和子「教師教育改革と教員養成の専門家集団としての大学」『日本教師教育学会年報』第16号、2007年、pp.42-49。
- (3) 下記の広島大学大学院教育学研究科の教職Pホームページを参照のこと。なお、教職Pは、2007年から文部科学省大学院教育改革支援プログラム採択事業として実施された「Ed.D型大学院プログラム」が2010年に終了してからの後継プログラムである。<http://home.hiroshima-u.ac.jp/kyo2/Ed.Dprogram/news/20.html>
- (4) 日本教育学会中国地区『平成25年度日本教育学会中国地区研究活動報告書 教員養成改革に対応する教職科目担当授業への取り組み—若い教育研究者の挑戦と交流—』日本教育学会中国地区、2014年8月、p.52。
- (5) 田口真奈・出口康夫編『未来の大学教員を育てる 京大文学部・プレFDの挑戦』勁草書房、2013年、pp.90-93。
- (6) 溝上宏美・杉山卓史・三宅岳史「プレFDプロジェクトと通じた参加者の変化」田口真奈・出口康夫編『未来の大学教員を育てる 京大文学部・プレFDの挑戦』勁草書房、2013年、pp.185-201。
- (7) 京都大学文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する研究科のオーバードクターによるリレー講義形式のゼミナールであり、公開授業とその検討会、学期末の研修会によって構成されている。毎回の授業終了後20分程度の授業検討会を行なう。一人の講師は2回から5回の授業を行ない、自分の授業が無いときには他の講師の授業を参観、検討会への出席という形でゼミナールに参加する。2009年より実施されている。
- (8) 境愛一郎・山口裕毅・張磊・久恒拓也「教職課程担当教員養成プログラムのめざすもの」広島大学大学院教育学研究科教職課程担当教員養成プログラム『平成25年度 教職課程担当教員養成プログラム報告書 先生を育てる先生として育つ』2014年3月、pp.20-35。境らによる第20回大学教育研究フォーラムにおける口頭発表の内容の一部を原稿化したものである。
- (9) 前掲註8、境ら「教職課程担当教員養成プログラムのめざすもの」p.32。
- (10) 受講生の記入するコメント欄と質問内容は、ⅠとⅡで形式が異なる。プラクティカムを実施するにあたってどのようなコメント欄を設定するかは指定されていないために、他の教職P履修者と同様になることの方が稀である。AはⅠのコメント欄では、授業についての感想・意見等をまとめて一つの質問で問っている。Ⅱでは授業の良かった点と改善すべき点で分けて記入するよう指示し、かつ別に大学院生の教壇実習が受講生にとって有意義なものと感じているか否かを5段階回答形式で尋ね、併せてその理由を記入する欄を設けた。
- (11) 教職Pプラクティカムでは、履修者の大学院生ごとに、2~3名の指導教員が担当者として配置される。履修者が教壇実習を行なう授業科目を受け持つ教員は「授業提供・協力教員」と称される。Aの場合、授業提供教員2名（本報告では仮にB、Cと呼称）と指導教員3名（D、E、F）がおかれている（2014年度教職P業務分掌より）。
- (12) 教職P修了者のこれまでの傾向として、学内でのプラクティカムの一方を、必修の教職に関する科目で行ない、もう一方は履修者の博論指導教員の受け持つ「教育学」の専門科目（これも広い意味では教職に関する科目の範疇に入るが、教免取得のための必修科目ではない）で行なうというパターンが多数派である。このパターンが慣例になりつつある理由を筆者は知らないが、結果的に、履修者が研究している専門の内容を授業に投影しやすくなっていると思われる。
- (13) 大杉昭英（研究代表）ほか『国立大学教員養成系大学・学部において優れた取組をしている大学教員に関する調査報告書』（国立教育研究所、2014年）において行われた、優れた教員養成の取組をしている人として27の国立教員養成系大学・学部の学長・学部長から推薦された者81名に対するアンケート調査（有効回収票65票）によると、教員養成担当の大学教員に求められる資質・能力はどのようなものか、という質問に対して、「とても必要である」・「少し必要である」と回答した割合が最も高かったのが、「教員養成担当者としての自覚」である（p.33）。
- (14) 図3は、ワークシートの授業評価とは別に設けた問「本時のように大学院生が教職課程の授業の一部を担当することは、あなたにとって有意義であると思いますか」に対する5段階回答の集計結果である。この問に対する回答は、前期のプラクティカムⅠの受講をした学生にはその経験も踏まえて記入してほしい旨を口頭で伝達した。

〔資料編〕 ※紙幅の関係により、掲載できていない資料もある。

資料2 プラクティカムⅠ 授業進行表			資料6 プラクティカムⅡ 授業進行表		
経過時間	授業の内容	特記事項	経過時間	授業の内容	特記事項
0分	授業開始		0分	授業開始、配布資料の確認の指示。	
0分30秒	授業担当者の自己紹介		0分50秒	本時の授業のテーマを提示。	
1分	本時の目標・題材の提示 およびその意味を説明する			広島大学教育学部を三つに大別できることを説明。	
2分6秒	教員養成について大まかな解説を始める。		2分20秒	それぞれの主な使命を解説する。	
3分20秒	PPTは丸写しするのではなく、エッセンスを抜き出してノートしてほしい旨を述べる。		4分42秒	I類、II～IV類、V類の前身校を説明。 本時の前半の目標(広島大学教育学部の起源(前身校)を探ることから出発し、近代学校制度を概説する)を提示する。	
4分	なぜ「教育の思想と原理」を受けなければならないか?という問いに答えていく形で教員養成の解説をする。		9分17秒	師範学校の教育課程を解説。	
	広島大学の教職科目の説明 課程認定制度の説明			明治期の中等教育への教員供給状況・ルートを解説。	
8分30秒	教員養成の2大原則の説明 教育職員免許法の説明		14分18秒	学校制度における「教育」と「学問」の系統について。	
10分20秒	教員養成の現状について、認定課程を持つ大学数・免許状取得者数、教員就職者数等のデータをもとに解説。		16分08秒	教員検定による養成ルートの説明。	
14分50秒	現行教員養成制度の枠組みはいつ、どうしてできたのか?		17分50秒	無試験検定制度の影響を説明。	
	教育職員免許法の初発 戦前の養成制度への反省から 養成制度のうち、直接養成制度を説明するため、		21分57秒	師範学校第二部について説明。	
21分14秒	Q1を発する。選択肢の提示。	4枚の色画用紙による回答。	22分31秒	国立教員養成大学・学部一覧紹介。	
	授業者のPCカメラで受講者の一斉回答を撮影し、プロジェクターに投影。		24分08秒	Q1「上で示した以外の教育学部はどこにあるか」を発する。	
26分	回答割合(目算)の提示。			机間巡視。	
27分	Q1によって知りたかったことを説明(教職志望度の異なる者と教職課程を取る)。		27分52秒	受講者の回答を指名して訊く。	
	直接養成制度を説明する。			受講者A(男性)「 授業者「なぜ教育大学が答えに入っているのか?」 別の受講者に訊く。 受講者B(男性)からQ1で問われていることを確認される。 授業者「教員養成系以外の教育学部はどこにあるかという質問」 受講者B「九州大学…」」	質問が大半の受講者に伝わっていないことに気づく。
28分45秒	師範学校の説明をする①。		30分10秒	模範解答の提示…大阪を除く旧帝大6つと、広島・筑波	
37分02秒	師範学校の説明をする②。		31分26秒	九州大学教育学部HPにアクセスし、学部紹介のページを提示。	プロジェクターで表示。
41分09秒	大学で養成することによる戦前との変化を説明。		33分10秒	北海道大学教育学部HPへアクセス。 「教育学系」というキーワードを提示。	”
44分03秒	前半部分のまとめを行なう。		34分11秒	鳥取大学地域学部のHPへアクセス、教育学部の新しい形の紹介。	”
45分18秒	ワークシート課題①の指示	3分ぐらいで	36分51秒	広島大学教育学部の特殊性について。 ⇒義務教育教員養成と教育学研究を並行して行っている。	
49分55秒	次の内容に進みたい旨を伝達する	あと30秒ぐらいで	37分40秒	同様のことを行なっていた事例として東北大学教育学部を解説(学問の系統と教育の系統に分類されていた大学と師範学校が協力して教員養成を行なう)。	
	間接養成制度の問題点を述べる。		40分42秒	授業者「教科に関する授業を他学部で受けたことのある方はいませんか?」 受講者C(男性)「生物生産学部の授業を」	
52分40秒	教育刷新委員会における教員養成議論の対立点について。		41分38秒	東北大学教育学部の歴史的経過(宮城教育大学分離)と、授業者の研究テーマで一部扱っているということを解説。	
53分30秒	Q2を発する。選択肢の提示と説明。		43分27秒	東北大学における教員養成の実態を1960年卒業生の成績表をもとに例示(中学校教諭養成課程専攻の者)。	プロジェクターで表示。
56分16秒	一斉回答させ、Q1と同様に撮影。		44分21秒	国語専攻の者を例示。	
56分31秒	回答割合の提示。		46分50秒	社会専攻の者と小学校教諭養成課程の副専攻の者それぞれの履修傾向を解説。	
57分14秒	アカデミシャンズとエデュケーショニストの主張・対立の解説をする。回答者はどちらに当てはまるか。教員養成二大思想の攻防へ。		53分27秒	授業の本筋へ戻る。	
62分30秒	学芸大学構想の登場と、師範学校機能の継承を解説。			宮城教育大学分離の理由を政策的、理念的側面から説明。	
69分24秒	広島大学 その後、1950年代後半から60年代の養成政策について。免許状取得要件の変化について。		55分49秒	東北大学評議会の声明書(授業資料⑥)から、「研究こそ大学の使命」であり、教員養成は合わないとの趣旨を説明。	
73分04秒	本時のまとめを行なう。		56分23秒	Q2「研究以外で大学の使命とはなんであると思うか?」を発する。	
77分56秒	ワークシート課題②と、本時に対する感想コメントの記述を行なうよう指示する。		60分49秒	受講者の回答を訊く。	
79分18秒				受講者D(女性)「高度な知識の供給」 授業者「このような内容を書いている人はどのくらいいますか?」 受講者E(女性)「後継者の育成」 授業者「誰の?」 受講者E「社会の」 授業者「広い意味で、人材養成ととってよろしいですか」	
86分53秒	授業終了、ワークシート回収開始。記録終了。		62分33秒	日本の大学の中では何が主流とされてきたのか? ⇒東京大学の起源と役割を説明する。	
			66分20秒	二つの機能(翻訳と人材養成、天文方から帝国大学へ)	
			69分38秒	日本における大学の役割の展開(模倣から創造、解放へ)	
			72分57秒	戦後新制大学に導入された一般教育の理念について	
			77分21秒	人材養成重視の大学使命観があるのではないかな…	
			78分01秒	授業内容の終了を宣言。 授業評価・感想コメントを記入するよう指示。	
			85分03秒	記録終了。	

資料8 プラクティカムⅡ受講生による授業感想シート・アンケート集計表

整理番号	コース	I (よかった点)	II (改善すべき点)	III (1)	III (2)
1	社会	Q2は考え方を揺さぶられる問いで考えさせられた。良問だったと思う。	資料とのかかわりがよくわからなかったです。	4	自分と年の近い先輩方がしっかりした説明をしているのを見ると良い刺激を受けるから。
2	国語文化		大学の成立を学習することが今の私たちにどのような意味があるのか、その学習意図がよくわからなかった。	2	大学院生さんにとっては有意義だと思います。学生としては、全体としてモチベーションが低くなってしまふ。
3	自然	身近なこの広島大学から入ったことで、内容につきやすかったです。声の大きさや緩急は適切だったと思います。Power point 見やすかったです。	レジュメが資料だけだったのでもう少し説明を書いて欲しいなと思いました。	4	自分でも来弁、再来弁と教育実習へ行くと考えると、こういった日々の授業の中から実習というものに触れることは、実習の種類は違えど良いことだと思います。
4	数理	昔の教員養成の学校や大学について知れた点	話し合う(意見を交換する)機会を設けるべき。	3	自分にとってはあまり関係ないから3を選びました。
5	社会	これまでの授業の流れを踏まえつつ、研究成果が取り込まれていること。	質問の内容、意図が分かりにくかったこと。	4	自分が研究者を目指すとき、どういった授業をすべきかという参考になったから。
6	国語文化	スライドが見やすかった	特になし	5	良い経験になりそうだから。
7	日本語教育	プリントを通しての活動は机上の知識だけでなく自分の考えや知見とつながるものだったので、今学習していることを実生活での学びとの関連づけができたこと。	説明的すぎるところがあって、理解しづらい箇所があった。もっと話の前後のつながりが分かりやすければ良いなと思いました。	5	まず、あまり歳の変らない方が教えて下さることは学習意欲につながります。そういった動機づけの部分と、教授の方よりも「分かりやす(し)よう」という姿勢が(経験が浅いからこそ)あると思います。
8	日本語教育	進度がちょうどよいスピードだったと思います。		3	きっと教授の方が慣れており、知識も豊富だと思いが、実際私たち学部生より、知識をもった院生から授業をしていただくことは、あまり、差のないようにも思っています。
9	日本語教育	メモのとりやすい ちょうどいい進み方だった。		4	変化ができて、授業の内容に興味がわいたから。
10	日本語教育	ワークシートを使っての授業だったので、主体的に取り組めた。	パワーポイントのプリントが良かった。書き写しに集中してしまうから。	4	お互いの刺激になると思うから。
11	数理	パワーポイントが見やすかった。声を通して、聞きやすかった。	特になし。	4	自分が将来、授業をするときの参考になる。教授とはまた違って、新鮮な気持ちになる。
12	社会	答えさせていた。	質問が分かりにくかった。	2	
13	数理	資料が多く、パワーポイントも見やすかったので、内容が入ってきやすくてよかったと思います。	特になし。	2	いつもの先生方と感じが違うので、刺激にもなるし、博士課程にいくこのような専門テーマをもって研究するのだなと考えられていいと思いました。
14	社会	パワーポイントがみやすくなってよかったです。明確に情報が。	広島大学からみていのかと思ったのですが、東北大学の方から大学の成立と展開をみていたのがわかりにくく感じるように思いました。(東大の例は分かりやすかったです…)	4	自分のため(将来の実習)になるから。
15	社会	以前、受講した「教育の思想と原理」での授業とも同じ範囲だったけれど、違う内容で、今まで教育学部でありながらあいまに考えていたところを知ることができた。	パワーポイントがすすりて見やすかったが、文章で説明するところは、もっと字を書いてもらえないと、内容の理解が少し難しかった。	4	普段の大学の授業から、実際に院生がどのように授業の方法を学び、いかそうしているかが分かるから。
16	国語文化	ご自身の研究テーマも取り入れながらの授業は興味深いかうことができた。	「あな達」より「皆さん」の方が自然	4	いろんな人、いろんな年代の人の授業を受けられるのは、有意義だと思う。
17	技術・情報	スライドを用いていたので、見やすくて良かった。一つ一つ説明が丁寧で、分かりやすかったです。		3	専門内容なのでしっかり学びたいけど、育成も大事だと思うので、一概にいいない。
18	国語文化	パワーポイントの使用によって事柄の関係性が把握しやすかった。	問いが答えづらかった。(問2.の答えは結局、パワーポイントの「研究と教育」(人材養成)に集約されたので、それ以外と答えに困った)。パワーポイントの図は見やすいが、ノートに取るのは難しいので、もっとノートを取る時間が欲しかった。	2	
19	日本語教育	複数の人を指名し意見を述べさせたこと。	レジュメにもう少し説明を書き加えていただけたら嬉しい。	2	あくまで教授の授業をとっているから。ありがとうございます。
20	日本語教育	資料が必要なものはまとめられていて分かりやすかった。パワポは前回より分かりやすかったです。	内容が前後した時に、「これ」「それ」「今」の内容がわからなくなっていていけない点。言いたいこと、問われていることがわかりません。	3	私にとっては有意義とは感じませんが、院生さんにとっては良いと思われ、それで未来の授業の質が上がるなら有意義だ感じるからです。
21	日本語教育	広大教育学部の歴史(分類)が分かった点。	資料で主要な点を1つずつ挙げてほしい。	3	教授になるための土台となるのは、自分もこれから教育実習で同じようなことをするのでお互い様。しかし、いつもの授業と同じような姿勢で受ける気にならないのが本音(テストに出るのか?いつも友達と話題になるから)
22	日本語教育	他大学との比較が資料も多く分かりやすかった。	ワークシートのQ1を書き除、何と書けば良いのか学生に伝わってなかった。(発問の仕方)	4	私たちも教育実習があるので、大学教員のための教育実習があるのも良いと思う。
23	自然	トーク	パワポをもっと見やす(う)しやす(課題)	5	自分が院生になったとき、そのような制度があるとよいと思う。
24	自然	資料が多かった。	いまいちど重要なこと分らないから。	4	自分の今後のイメージにつながる
25	自然	具体的資料を多く用意してくれ、分かりやすかった点。	ノートを取るべきポイントが分かりにくかった点。	3	普段の先生が行ってくださった方が明確に伝わって、何回かの授業で構成を考えてくれるが、一部を担当すると、そこがはつきりしない。だが、我々と同じ目線で授業を展開して欲しい、気分転換にはなるため。
26	数理	大学の使命とか考える時間をとっていた。	どこが大切なところなのかよくわからなかった。	2	大学院生にとっては非常に有意義だと思うが、説明したところとわからないところが通常の授業よりも多いので、大学生も有意義か、と言われたらそうではない気がする。
27	数理	研究の話等詳しい話が聞けておもしろかった。	最初と後半の基本事項の説明がわかりにくかった。	4	院生の方が研究している事等とても詳しい話が聞けるため。
28	自然	スライドが見やすかったです!	資料が左右して見にくかったかもしれないです。	4	こういう風に大学の先生になるのかと思ったから。
29	自然	内容的に一方向的にずっと話されると分かりにくいもので、所々で問いを投げかけて下さって取り組みやすかった。		3	内容どうこうではな(TAさんの授業)ってだけで少し楽しんで授業を受けがちななってしまう。
30	技術・情報	具体的な事例が多くて分かりやすかったです。	授業名との関わりが分かりにくかった。	4	新鮮な話が聞けるから。
31	技術・情報	授業中に課題を出して(くれる)形の出席カードの方が授業に興味をもてたと思う。	質問の内容が少し分かりづらかったこと。	4	結局は自分の意識で授業への関心は変わらなと思った。
32	自然	資料、スライドの見やすさ、ネットなどを使った教材、前より準備がなくなったと思う。	せまいスペースに板書をするなら、見にくい、後々分かりにくいので、スライドに入れて頂きたい。	3	普段とは少し異なる授業を受けることができるのは良いが、前の授業の流れを切ってしまう点、授業の質という点で問題があると感じたから。
33	自然	生徒に身近な広島大学を導入に用いて授業を始めていたところ	発問が漠然としていて解答がしづらい。今日の内容のテーマが明確に示されていなかった。(授業開始時)	3	私も教育実習を行うので、協力しなければならぬという使命感。学生に有意義である点にはほとんどないのかもしれない。しかし、教授より、少しリラックスして授業が受けられる。
34	数理	学生の活動の時間を設けた点 パワーポイントは見やすかったが、字が小さくて見えないところがあった	レジュメが見づらい。 話し方が少し固いように感じた。(もう少しラフに)	3	私にとっては熱線の方の授業が良いと思うが、院生の方がこれから大学講師を目指していく中で必要な経験であり、自分たちと同年代の近い方の授業から得るものもあると思うので、どちらともいいないと思う。
35	技術・情報	新鮮味があった点。パワーポイントが見やすかった。	授業にメリハリがない。	3	誰であろうと、学ぶべき内容は同じである。
36	技術・情報	関心を向けられる内容を取り上げていたところ。	スライドに映す字が小さすぎ、(01)のとき。授業の方向性が不明。	4	授業自体は普通です。内容はなかなか興味深いものでした。がんばって下さい。
37	英語文化		もっとずらして話してほしい。 スライドが何が言いたいのか、図が分からない。	1	おもしろかった。
38	社会	データをたくさん用意しているのは、良いと思いました。	レジュメの表、①が左から始まった方が良いのでは?	4	私も大学院に進学しようと考えているため。
39	自然	レジュメがあってわかりやすかった。	質問が少しわかりづらかった。	4	いずれ教育実習で自分もそういう立場になるので、客観的に実習を見ることができそう。

40	自然	授業の中でずっと説明ではなところどころワークシートに書き込む時間があったため、たいくつなかった。	パワボがわかりづらい。本時の目的が明確でない。(なにが主な内容かわからなかった)	1	教職課程は、教職の内容であるため、できるだけ体験を得た人が授業を行ってくださった方がわかりやすいし、入りこみやすい。
41	数理	パワーポイントが見やすかった。	レジュメに情報を詰め込みすぎだと思う。	2	院生にはメリットがあるかもしれないが、自分たちにとってはあまりメリットがあるとは思えなかった。
42	英語文化	生徒に質問を投げかけていた点。	大学院生だからこそ教えられる内容や方法をもっと意識して授業づくりができた、有意義な講義になっていたと思う。	3	授業そのものが有意義であれば、大学院生だからこそできる授業内容ならば有意義だと思う。他の教授が教えられる内容なら有意義であるとは言えない。ありがとうございました。
43	社会	教員養成の大学とそうでない大学のちがいがよくわかった。	スライドの中にあった大学の名前が小さすぎて読めませんでした。	3	あまり変わらないと思った。
44	英語文化	実際にHPをみせてくれた点。 図式化しているような資料を提示してくれていた点	説明方法や指示がわかりにくかった点 大人数に対する講義に対してスライド(資料を含む)の文字が小さくて見にくい点 授業中の話の流れがとびとびでわかりにくくなってしまっ点	3	自分たちが実習する上で直さなければいけない改善点や良かった点が学べる一方、その人の授業がわかりにくかった場合、(指導法など)自分で勉強しなければいけない部分が増えると思ったから。
45	英語文化	配布されたプリントの資料がわかった。 実際にHPを見ながらだったので分かりやすかった。 広大の仕組みを知ることができて面白かった。	授業のスライドで示された図が分かりにくかった。矢印が何を示すのかわからない。ノートに書き出す時間がほとんどなかった。	3	大学院生ということで自分と年齢が近いぶん、話の内容に興味があったが、今日の授業もテスト範囲であるということに少し不安を感じるから。
46	自然	図を用いて難しい内容も視覚的にわかりやすくてくれていて良かったです。色、(顔文字)、(顔文字)を使っているのも良かったと思います。 Q1に対して解答を聞いているのも、学生が考える部分もあって良かったです。	ノートにうつしきれなかったため、パワボの進め方をもう少しゆっくりするか、パワボのレジュメがほしいです。	3	よくわかりません。
47	数理	東北大学の例など、具体例や実際のことがらを取り上げているところがいいと思います。	特になし。	5	学部生と同じような視点で考えられる可能性が多(ある)から。
48	数理	パワーポイントが見やすかった。	特になし。	5	
49	数理	スライドがすっきりして見やすかった。	教員養成系がある大学の所だけ字が小さくてほとんど見えなかった。	4	同じ先生がしている途中にしてもらえる新鮮で刺激があるから。
50	数理		パワボの表(大学名が書いているもの)が見えにくかった	3	有意義かどうかは分からない。
51	自然	若さ	図をもう少しわかりやすくてほしい。	4	いつもの授業とは違う楽しみがある。
52	日本語教育	実態だけでなく広大のことも例に挙げられていたため取りつきやすかった。	図の矢印やそれなどの指示語が何を示しているのかわかりにくいところがあった。	4	実際に同じ課程を通してきた先輩からこそ言える話があれば聞くことができるし、生徒の気持ちも分かってもらえていると感じるから。
53	日本語教育	広大のことを知れたこと。 広大教育が全国の教育学部の中でのどのような位置付けなのか分かった。	話をきくのが長かった。 前期のA先生のスライドに出てきたキャラクターが出てきた。	4	私たちが教員になるために教育実習に行くのと同じように、将来的に大学教授になる可能性がある人は、実習を経験しておく必要があると思うから。
54	自然	広島大学についての導入は興味を持って良かったと思いました。	結局何を学べばいいか(？)学ばせたいか(？)がわからなくなった。	3	いつものとは違う新鮮な内容がきけて楽しいと思う。
55	自然	スライドが見やすかったです。	(おぼけがいなくなりましたね...) 資料のみでレジュメ的な物が欲しかったです。	4	新鮮な気持ちになるから。
56	技術・情報	スライドが見やすかった。	いつもの講義との関係性。	3	少しわかりづらい部分もあったから。
57	日本語教育	資料の充実	パワボのレジュメもあるといい	3	院生の経験にはなると思うけど、完備な授業ではない。
58	日本語教育	パワーポイントが分かりやすかった。 説明も(だけ)で分かりやすかった。	資料を表や文の抜き出しだけでなく、キーワードなども入れてほしい。	5	自分達と比較的歳が近い人の授業を受けるのは、良い刺激になると思う。どういった研究を大学院でするのかわかり興味深い。
59	自然	難しい言葉が少なく、一文一文の意味が良く分かる。ついていきやすい講義であったと思います。	Q1の質問の意味が最初分かりませんでした。その時のスライドでは後ろの人は大学名が見えずに回答しづらかったと思います。(レジュメに印刷していただくと良かったです)。	5	新しいスタイルの講義に出会うことができる可能性が大きいと感じています。
60	自然	広島大に触れつつ、大学成立の流れを説明していて、入り込みやすかった。Aさんの研究テーマが興味深かった。	いまいQ1の問題の意図が伝わっていません。 正直、何を書けばいいか、友人と話すまでわからなかった。	5	年代が近いということもあり、良い刺激となる。
61	自然	実際の資料を使用していたため、イメージ易かった。	質問が少し抽象的というか、枠が広がったため、少々考えにくかったように感じた。	3	自身が授業するときには...というように、自分を当てはめて考えてみることは有意義であるし、その人が専門とする分野を話して下さるのは良いが、やはり教授が話して下さっている時の方が集中し易いと感じてしまったため。
62	技術・情報	考えるポイントがあり、興味をひかれた。	レジュメを補足資料のみではな(穴)めのようなものを採用してはどうか。	5	近い年代の方が授業しているのを見るのは、自分の将来や近くにある教育実習にとって有意義になると考えるから。
63	技術・情報	資料づくりがしっかりしている。	レジュメが資料のみしかなく、振り返りができない。	1	本授業と内容がずれる。 内容の定着が弱くなる。
64	数理	発問の仕方がおもしろかった。	内容が良かった。	4	新鮮。
65	技術・情報	教育について、大学の歴史から学ぶことが出来てとても良かったです。	レジュメにおいて説明文みたいなのがほしいかったです。	4	何をその院生さんは研究しているのかわかることが出来るから。
66	技術・情報	成績表の実物を使ったこと。	寒い ドアを閉めてほしい。 レジュメが資料だけで授業を思い出すものとしては不足。	5	Aさんが将来を見据える上で必要なことだから。
67	数理			4	年の近い人の考え方を学ぶことができる。
68	自然	説明や資料が丁寧でした。	少し単調さを感じました。	5	親しみを感じます。
69	自然	授業中に間などを含めていた点。	質問を分かりやすくする点。 表が見えにくい点。	4	今回のようにセメスターの流れにのったものなら良いと思うから。
70	日本語教育	スライドがシンプルでわかりやすかった。 指名されるかもという緊張感があった。	個人的に空所を補充するタイプのプリントにそった授業だとやる気が一段と上がります。	4	自分が院生になったときの姿(何をするか)などが具体的に想像できるから。
71	日本語教育	ワークシート形式。	ワークシートの質問の内容があまりよく分からなかった。	3	院生にとっては良い機会かもしれないが、自分たちにとっては正直どちらでも良いから。
72	社会	広島大学の例を中心に話が導入されていたので、興味をわきやすかった。	なし。	4	視点が分かりやすい(学生としての目でみれる)。
73	数理	スライドの文字が大きいところ。	質問の意味が分かりにくかった。 プリントの順番。	4	研究内容も含めた授業となるから。
74	数理	ワークシートを使った活動があったこと。		4	いつもと違う講義を受けることで、気分転換になるから。
75	日本語教育	資料がたくさん使われていたので話に説得力があった。	指示語が多いのと、話が前後して内容が分かりにくかった。	4	教授だと自分のペースで授業を進めるので話が遅い、速いがあったが、親近感が持てるペースもちょうどよかった。
76	英語文化		指示がわかりにくかったです。あと板書する時間がなかったり、何を板書したらいいかわかりませんでした。	4	生徒に近い立場だと思うので、生徒の気持ちを理解した授業がそのめるとも思ったのですが、やはり教えた経験が少な(知識も教授ほどではないかな)と感じたのでどちらかといえば有意義かもしれないと考えました。
77	英語文化	P・Pが見やすかった。	なし。	3	院生さんからするととてもよいことだが、学生からすると学費を払っている以上教授の授業を受けたいから。
78	社会	スライドの図がみやすかったところ。	問いが伝わりやすかったため、もう少し分かりやすく、質問してもらいたかった。	4	気分的に。
79	自然	学生の視点に立っており、雰囲気良かった。 PPの出来は素晴らしいと思った。	PPの出来はとも良かったが、複雑な説明をメモしながらPPの図を書き写さないといけないので、PPも資料として配布して欲しかった。	4	学部生に近い立場でモノゴトを考えて授業を進めてくれるため。

80	技術情報	導入が良く、授業の指針が何なのかが良く分かりました。 広大以外の大学を例に出したり、WORK SHEETがあったので、色々と知れたり考えたりできてよかったです。	スライドの図が大きくて見やすかったのですが、図だけでは分かりにくい所があるので、説明文も一部、図といっしょに載せてくれると嬉しいです。	5	研究している内容がよくて、それを上手くアウトプットできないという意味がないし、そのための経験の場として必要だと思います。
81	英語文化	パワーポイントがとても見やすい、説明と相まってとてもわかりやすかったです。	ワークシートがいらなかった。	2	院生の方にはよい機会だと思いますが、学生にメリットがないから。
82	国語文化	パワーポイントがよかった。見やすかった。	Q1が養成系の教育学部を答えるのかと思ってしまった。授業のテンポがゆったりしている。	3	教授らの講義を聞くのと院生の講義を聞くのどを比較したとき、どちらの方が有意義かというとは思わないから。
83	国語文化	学生への問題提起(ワークシート、タイミングなど)	資料が見つからなかった。	4	いつもと違う指導で、新鮮だから。
84	数理	院生の研究内容を授業内容に入れていた所が面白かった。スライドが分かりやすかった。	特になし。	5	教授より院生の方が自分たちと近い感覚を持っているので、聞いていて理解しやすかった。
85	国語文化	声よかった。 プリントに穴うめの質問があって、寝ずに聞いていられた。		5	自分が授業をすれば、どうするだろうかと、よりリアルに考えることができるため。
86	自然	パワボ見やすかった。	レジュメが少し見にくかったです。Q1が分かりづらかったです。この授業の目的は何ですか。	3	大学院生さんが授業するのはいいけど、担当の先生とのつながりが分らなかった。
87	自然	図が見やすかった。	特になし。	5	一人で偏りのある授業をするよりも多くの意見や考えを聞くことができるから。
88	自然	色々な人の意見が聞けたところ。	内容が薄く広かったので、もっと詳しく聞きたい所もあった。	4	色々な人の意見や研究を聞いた方が良いが、大学院生は教授に比べるとやはりおとなる所が多いから。
89	自然	資料が多かった点。	パワボをレジュメにのせてほしいから。見返しがしにくい。	4	来半実習に行く身分として、授業の進め方の参考になる。
90	技術情報	大学教育についての系統の流れについて、スライドを聞いて分かりやすい内容とても良かった。	少し単調だと感じたこと、宮城師範が宮師範とスライドにあったような気がする。	4	教科教育でDrに進むより教育学でDrに進むことかどういふことなのか比較的年齢も近く分かりやすい。
91	自然	話しが急にとんだりせず、わかりやすかった。	特になし。	5	教育の大学のことについて、知っておくべきことをスムーズに理解できたから。
92	技術情報	パワーポイントが見やすかった。	質問の内容、意図がわかりづらかった。	4	自分が教育実習に行った際は、こういうところに気を配らうなどといった手本になる。少しいつもと内容が異なるので困る。
93	技術情報	考えさせられる部分もあり、授業をしっかり聞いておかないといけないから。	レジュメが見にくかった。	2	やはり教授の方が授業としてできているから。
94	数理	説明、パワボが分かりやすい。	ほとんど聞けなかった。	3	
95	数理	自分の研究を交えて話をしてくれたところ。	どこどころはスライドが次に行ってしまう、メモがとれなかった。	4	現在どのような研究が行われているか、ざわりだけでも知ることができいい機会だから。またずっと同じ担当教員とはまた違った目録の話も聞けるから。
96	国語文化	広大といつても身近な例を取り上げたこと。	大学教育の意義をもっと語ってほしいから。最後の一般教養とか。	5	大学を、研究者を育成する機関であると捉えているから。その育成の一部を学生が担えることは非常に有意義であると思う。
97	国語文化	自分の研究の話をしたところ。	問題がわかりにくいときがあった。	4	数多の人の授業を見ることができるといい。
98	国語文化	PPが見やすく、説明が入っていきやすかったです。	話し方が淡々としすぎていて、どこが重要なかが分かりません。	3	有意義かどうか判断しにくかったから。
99	国語文化			2	大学院生には有意義だが、私達にとっては保障された授業を受けられる訳ではないから。
100	技術情報	生徒が参加できるようにあって、パワボを使ったり分かりやすかった。	少しおちょこち悪い感じがする。	3	まわりたにたん人がいて緊張する。
101	技術情報	質問が分かりやすかった。 ワークシートが記入しやすかった。	もう少しはっきりと話すべきだと思います。	3	大学院生の授業を聞くのはいつもと違い新しい感じがするから。
102	国語文化	ワークシートが説明を聞いたことから考える必要があって、授業にメリハリがあった。	ワークシートQ1で何を答えるべきかわかりにくかった。	2	講師が変わると違和感がある。
103	英語文化	東大がでてきた。スライドがわかりやすかった。	質問をする時に、何が質問なのか分からないので、質問をスライドで出すべき。 質問するときの意図がよく分からないので、質問にどう答えていいかわからない。	1	大学の先生に比べて、分かりにくい所が多いから。また、今日の授業内でやったことは内容が少なすぎたと思えたから。
104	英語文化	特になし。	スライド中の図やチャートが複雑で分かりにくかった。 話し方が少し速いところがあるような、自信なげだった。	3	教授であるのと大学院生であるのと、学生が授業内容をしっかり理解できるように授業を運営できればいいと思うので、授業者が誰であるかは問題ではないと思う。ただ、教授の方が知識が豊富で高水準な思考力を有しているため、その点では有利であると思う。
105	社会	スライドで図を説明しており、見やすかった。	大学名の質問が分かりにくかった。	4	マンネリ化しない。
106	社会	無駄のないまとまったスライド。	問いが何かわからない(不明確)	2	できれば専門の先生に授業をしていただきたいが、実習という形で授業を行うことは必要なので仕方ない。大学院生の独特の研究を紹介してくれるのであればおもしろいかもしれない。
107	社会	根拠がはっきりと示している。 図は見やすかった。	つかみどころが分からなかった。語尾をはっきり。	4	教授たちとは一味違う内容が学べるし、指導の仕方の参考になると思う。
108	英語文化	図による解説が多かったです。	特になし。	4	より世代の近い人が授業することは教える側と学ぶ側の目標が近いということになるから。
109	自然	広島大学教育学部、他の大学の成立過程を学ぶことによって、大学では何をすればいいかというところを学ぶ機会になった。	それぞれが独立しているような感じを受け、何が伝えたいのかかもう一つ伝わってこなかった。	4	様々な人の授業、特に歳が近い人の授業を受けるのは新鮮で良い刺激になると思うから。
110	社会	分かりやすかったです。	受け身の授業。	4	大学教員を育成するには必ず必要だと思う。
111	社会	スライドが見やすい。 考える時間が十分にあった。	質問が抽象的で考えにくい。	5	私たちが中・高で教育実習を行う。それは将来中・高で教壇に立つための重要な訓練である。大学で教えるようになる人も実習を行わないと大学教員としてのスキルが養われない。
112	社会	時間通りに終わったこと。	質問で学生に何を聞いているのかわかりづらかった。それとか代名詞を用いるのではなく具体的な文章にしてほしい。	2	自身の研究を紹介するとなると学生が関心を抱くことは少ない。大学のあり方について考えることは教員養成と関連があるか？
113	数理	パワーポイントが見やすかった。	発問時の言葉選び。	2	あくまで、授業に不慣れな学生だから。
114	英語文化	説明が遅くなく速く(ちょうどよかったです)。	スライドが字が小さいすぎて見にくいときがありました。	3	どちらでも、特に私には影響がないので、有意義かどうかはどちらともいえないです。
115	数理	参加型にしている点。		5	先生によって、価値観が違うので、違った意見が聞けること、院生が授業をするという点は刺激になる。
116	社会	教員養成系と教育学系の違いがわかったこと。	質問がわかりにくい。	5	人材育成や大学院生の研究内容が学べる点。
117	社会	スライドが見やすかった点。	Q1の質問の意味が分からない人が多かったと思うのでもう一回(わ)く言って欲しい。	4	人材育成には必要であるから。
118	数理	パワボが見やすかったです。		4	
119	社会	資料がとても豊富であった点。 図解がシンプルでカラフルなものであり見やすかった。	本授業を通して1番のポイントがどのくらい分かったか。	4	教育学部生に教育実習が課されているように院生にもそのような試みは必要だと思う。現場に立ってこそ分かることはおおいだろうし、自身の能力の向上にも役立つと考えるので、自分も院生であればあったほうが良いと思う。
120	社会			1	大学院生よりも教授等の授業のほうが学生にとって身になる。
121	英語文化	所々クイズを話すことで生徒の活動を促すこと。	事前の説明をもう少し丁寧に2回くらい繰り返してもよいと思った。	4	大学院生のためにもなるし、僕らにとっても新鮮だから。
122	英語文化	パワボのスライドが分かりやすかったため、視覚による理解ができた。	生徒同士で話し合ったりで考えが共有できたらもう少し楽しかった。	3	本来教える先生がする授業との比較をしてないから。
123	日本語教育	授業内容が興味深かった。広島大学を取り上げたため、イメージがしやすかった。	ないです。	4	いつも先生と異なることで、新鮮さがあった。
124	国語文化			3	
125	国語文化	図式化されていて見やすかった。	レジュメが資料のみなので、どこをやっているかわからなくなるときがあった。	3	先生より親しみをもって授業を受けることができるが、「院生さんの授業だし」と真剣に受け取らない人もいるから。

126	自然	考えさせる部分があることで、積極的に授業に参加できた。	レジュメが見づらい。 1つめの質問の意図が伝わらなかった。	5	教育実習のように経験してみなければ、わからない部分が多いし、経験して得たものこそ大事だと思うから。
127	日本語教育	前回よりパワーポイントが見やすかったです。	質問が少しあやふやで何を考えてよいかわかりづらい。	4	教授よりも近い視点で話していただける気がする。
128	国語文化	スライドはまとまってよかった。	授業の方針がわかりません。なにに向かっているのかわからなかった。	3	一斉授業だと、内容次第だから。
129	日本語教育	前回よりパワーポイントが見やすかった。	発問の意味がわかりません。 どこについて話しているのかわかりません。 図の意味がわかりません。	2	教養教育科目でした方がいいのではないかなと思う。教職関係は教授から学びたいです。
130	日本語教育	ワークシートを用いて、飽きさせないように工夫がされてた点。	説明が少し分かりにくい、喋り方が単調で聞いていて眠くなってしまう点。	3	大学院生にとっては有意義だろうが、学生からすると誰がやってもあまり変わらないから。
131	国語文化	文字が大きく、パワーポイントが見やすかった。	発問の意味をもっと分かりやすくしてほしい。	2	授業とのつながりがわかりにくいから。
132	国語文化	パワーポイントが見やすかった。	少しテンポがゆっくりしていて、眠くなった。	3	特にいつもの授業と変わらないような気がするから。
133	日本語教育	グローバル大学への選出を受けた今日、大学の根本から考えるという授業は、内容もタイミングも良かったと思います。英語で授業を行うという表面的な変更ではなく、ルーチを見直し今一度「大学」を考え直す抜本的改革を行うべきなのではと改めて思える授業だった。	手元資料をパワーポイントに映し、スライドだったものがレジュメとして手元になれば、より授業が分かりやすくなったと思う。	5	現役で研究を行っている人の話を直にききたいから。
134	日本語教育	資料が豊富だった点。	図が少し分かりにくかった点。 話が前後していた(と思われる点)。	3	ふつうに教授の講義を受けたほうが分かりやすいのではないかなと思うが、自分たちと比較的年齢の近い人が同じような目線で説明してくれるというメリットもあるから。
135	英語文化	資料レジュメ、スライドなど、副教材をしっかり準備していた。 授業内容を最初に示したので、本針がわかった。	質問の意図が分からないときがあった(スライドの字も見づらい)ことがあり、そこから生じたと思われる。資料の構成をもっと意識すべきと思った(表面や裏面を行き来した)。	3	本講義、教授の授業と比べたわけではないので、コメントしづらい。
136	日本語教育	何をやるかの説明、その理由を話す前に言ってくれたのは良いと思った。	正直パワーポイントはあまり見やすくなかったです。特に最初の師範学校と学問の図が結局よく分からなかった。	4	大学の教員は、後継者、学問を伝えることも重要だと思うので、学校の先生と同様に分かりやすい指導方法にも少し気を遣ってくださると嬉しいです。
137	英語文化	質問について考える時間と教育で共有する時間があつた。	特にありません。	4	大学院生がどうい研究をやっているか知りたいから。
138	社会	数値データを用いた資料を使用した点は理解しやすく、客観的視点で考察することができた。	パワポを板書する際に書きづらい⇒順番がバラバラ。 パワポのスライドを変えるのが早い。 単調な言い方でどこが重要なのか、何を覚えてほしいのかわからない。	2	ほとんど学ぶ所がなく、面白くない所が多い。
139	国語文化	特になし、他の5人の先生と同じ。	特になし。	3	私にとっては特に有意義ではないが、大学院生にとっては有意義なんじゃないですか。
140	自然	学生に質問を投げかけ、考えさせること。前で話すだけのつまらない授業ではなく学生がしっかり参加できる授業だった。	レジュメがバラバラで見づらかった。	5	時代の移り変わりの中、今求められている授業を学んでいる院生がそれを体現しようとしているようで自身にとって非常に有意義である。前回の思想と原理の授業も学生が参加しやすい授業であり、個人的に非常に良かったから。
141	技術情報	後半になるにつれて伝えたい内容などがはっきりとわかりにくかった。	前半の方は何の話をしているのか、スライドも見にくかった。	3	やはり大学教授の方がわかりやすい。でもそれでは大学院生の練習の場がなくなるから。
142	英語文化	ワークシートがあつて、それぞれが自分で考える時間があつた所。	授業の趣旨、目標のような最終的に何が重要であつたのかわかりづらかった。	4	このような機会は経験を意味で必要であると思うし、授業を受ける側にも新鮮で良いと思う。
143	英語文化	パワーポイントなども整理されていて、理解しやすかつたです。	特にありません。	4	大学生に近い存在なので大学生のわからないところをよく理解していると思うからです。
144	英語文化	私たちの身近なピックを取扱っていただいたので楽しかつたです。	生徒のふんざいであつかまいかもしれませんが、グラフと話す時、教室内ムラツとした感じになると思います。	2	生徒にとってはあまり有意義ではないが、実習生には非常に有意義であると思う。
145	日本語教育	ワークシートを用いて参加型の授業にしたこと。	時々ボソボソと何を言っているのかわからないときがあつました。	4	教授が行う授業よりも親密で近い感じがするので受けやすい。
146	自然	生徒参加型。	レジュメが見にくい。	2	少し普段の授業からははずれるから。
147	数理	大雑把な教育学部の系譜がわかつた。	教育供給からみた日本の学校制度①、②の矢印が何を表わしているのかきちんと明示して欲しかった。	5	教授とはまた違った視点で授業が行われるかもしれないから。
148	数理	導入で身近な広島大学を例に挙げられており、抵抗感なく授業に入っていた。	ワークシートの質問で問われていることが少し分かりにくかつた。資料の順番と授業の内容とが少しずれていた。	4	普段の授業よりも自分に身近な方が授業をされることは興味深いから。
149	日本語教育	言葉にユーモアがある。	きちんとした言葉遣いをするべきではないか。	3	毎日同じ先生が授業をするより話を聞く。今日の授業のパワーポイントのレジュメ?ワークシートが欲しいと思つた。
150	日本語教育	クイズ形式で分かりやすくおもしろかつた。	スライドを進めるのが少し早いと思つた。	3	良い点、悪い点どちらもあつたと考えられるから。
151	日本語教育	意見を生徒に言ってもらつた点。	言葉遣い。	4	授業をする難しさがわかるから。
152	日本語教育	授業の随所で学生に考えさせる機会があつた点。	レジュメがあつたよかつたです。	4	いつもとは違った授業で新鮮に感じた。
153	英語文化	一方的な講話のみでなく、色々考える機会を与えられた。	スライド映写の画面が非常に見えづらい。	2	学生にとって有益な点は特に見当たらなかつたから。
154	英語文化	ワークシートを作成することによって考える時間が設けられていたこと。また、学生をあてて、答えを聞いていたことが良かった(他の人々の考えを聞けるので)。落ちついた話し方で聞き取りやすかつたです。	内容面は興味深かつたです(教育学部について理解を深めることができました)。話し方の面ですが、「えーと…」や「あの…」という表現がかなり多かつたように感じたので、その点が改善されると、更に良くなると思います。	4	先生方とは違った視点で授業の要所要所に感じ取ることができて新鮮だつたからです。90分の授業を作るのは大変そうだなと思つました!これからも研究頑張ってください!良いお年を。
155	英語文科教育専修(大学院)	説明がいていねいでありやすかつた。 ご自身の研究と結びつけられていて、興味深かつた。	細かい数字の載っているデータ等はハンドアウトとして手元にあると良かったかなと思つます(目が悪いので全く見えませんでした)。具体例を出す時は、説明→例示の順だとより分かりやすかつたのでは。最初に大まかな流れを説明して頂けるとより理解しやすかつたと思つす。	4	自分の将来の姿がよりリアルに想像できた。

二つの教壇実習を終えて

筆者：久恒拓也（教育学研究科 D2）

教職 P 履修二年目の大きな山場であるプラクティカムを終えて、感じたことを記しておきたいと思う。

まず、前期のプラクティカムⅠも、後期のプラクティカムⅡも、「ひとまずやってみた」という感が非常に強いということを書いておかねばならない。教職志望の学生が行なう教育実習では通常、一つの単元（あるいは教材）について複数回で構成される授業計画を練るが、プラクティカムは 90 分に教えたいこと、学んでほしいことを凝縮して詰め込むことになるため、授業に慣れない実習生の身としては、どれほどの分量を扱うのが適当であるかを理解して臨むのが困難であるという問題を抱えてしまう。また、学び手が授業者の伝達する情報をどのようにとらえ、どの程度咀嚼できるのかを実感として把握する機会がほとんどないため、授業中に学習意欲を喚起するような仕掛けや問いを設定する際に、どの程度の効力を持つかわからないものである。

上述したようなことをある程度克服するために、授業の事前（あるいは事後）検討会での教員らからの指摘・助言があるのではないかと、思われるかもしれない。しかし、そこについては「百聞は一見に如かず」で、実際にこちらがねらったようには伝えたいことが伝わらない、あるいは大した工夫をしなくても伝わる、という体験をすること自体がとても重要であると感じている。身近な大学教員と全く同一の授業をするのであれば話は変わってくるが、そうではなくて、履修者自身で授業を組み立てて実施する以上、自分固有の呼吸の中で行なった取り組みに対する手応えこそが、その後の成長の糧になるのではないだろうか。

もちろん筆者の学習者理解の不足も棚上げしてはられない。全体的に、筆者の大学生理解にはかなり偏ったものがあるように今となっては思う。問題として大きなものは、大学生の理解力・思考力に対する過度な期待を抱いていることであろう。授業中、大学生に考えさせるような問いを出す前に、準備をして注意を惹きつけたり、授業者側の意図を必要な範囲で伝えたりといったことが必要であるとプラクティカムⅡの事後検討会以降強く認識しているのは、もともと筆者の持っていた大学生像が現実とかけ離れていたことの現れであろう。受講者に、大学院生の授業は自分たち学生と近い目線でやってくれるので良い、というコメントをもらったこと自体は嬉しいが、皮肉にも近いのは年齢だけで、大学院生として長くあり続けるうちに目線は変質してしまっているようである。とにかく、学生自体に対する眼を養っておく必要は大であろう。

次に、教壇実習を通して、迷いが生じたことや、分からなくなったことを述べておく。

（1）授業内容の適切性

実習生という立場に深く入ると忘却してしまいそうになることの一つに、教職 P の「教職」の部分に対するコミットメントがある。筆者が行なった授業は、教職課程の授業として、またそれを受ける学生（教員予備軍）にとって適切なものとなっていただろうか。1

回目の場合、教員養成の枠組みを巨視的にとらえることに主眼がおかれた内容であり、学生の食いつきは良かった。筆者はこれまでの経験から、教員志望者は幅広い視野を持つべきと考えている。彼らは子ども（被教育者）や教員という職業理解に関する知識には感心を強く持ちながら、自分たちがどのように教員になっていくのかについては案外無知である。教員志望者がおかれている制度や状況を俯瞰するという授業内容は、総合的な教員理解の一環といえる。しかしながら、教員志望者は養成の制度や枠組みがどうなるのが従わざるを得ない立場に将来おかれるため、たとえ学生にとって本時の内容はおもしろいとの印象を与えたとしても、それ以上のものはないようにも思う。2 回目のプラクティカムでは、後半で日本における大学の成立・展開・役割を扱ったところ、受講者からは「大学の成立を学習することが今の私たちにどのような意味があるのか」「大学のあり方について考えることは教員養成と関連があるか」という疑問が出されている。教員養成研究の視点に立てば答えは「ある」となるのであるが、受講者の立場を考慮すれば、強くは主張できない自分もまた存在する。90 分の中身が教師教育にかなったものであるかどうかが最重要という姿勢で臨むならば、かなりの割合で大学院生の授業には合格を与えられないような気がする。

（2）教壇実習のタイミング

15 回の授業構成の中に、自分の教壇実習がどう入れ込まれるかという問題。なぜ問題と書いたかと問われたら、そのタイミング次第で、受講者側から独立した 1 回とみなされるか、本来の授業担当教員の行なうはずだった授業の一部とみなされるかが変わってくると感じたからである。1 回目は授業のある程度の行程を終えた後の 14 回目、受講者側からすればオプション的な印象を受けてもおかしくない。2 回目は第 10 回であるがオムニバス形式で、担当者が交代してから 2 回目にあたる部分に入ったためか、「授業全体における位置づけがわかりにくい」「講師が変わると違和感がある」という趣旨のコメントをした受講者が見受けられた。そうした印象は、受講者の授業評価にも何らかの影響を与えていることも考えられる。

本来の授業 15 回との整合性をとることを重視すべきか、実習に臨む大学院生として、こういう授業をしてみたいという挑戦に重きをおくべきか、その二項対立で考えること自体が誤りであるならばどういう視点を持つべきか、わからなくなった。

（3）教職 P で形成される（予定の）教職課程担当教員としての実践的力量的の守備範囲

教職 P の履修プロセス概念図を眺めていると、「教職課程担当教員としての実践的力量的形成」という文言を確認できる。履修している身としては、これが何を示しているのかが気かりである。90 分の授業をこなすことができるようになることを想定しているなら、達成できる可能性は高いと思う。ところが、教職課程の授業科目の種類は多岐にわたることから、自分が将来担当すると予想される数種の授業について実践・理解することのみでは、教職課程全体に対する認識を深めることはできないと考える。D1 で履修する「教員養成学講究」において、他大学の教職科目についてシラバス上からの分析は行なうものの、実際にどのような授業がなされているかは計り知れない部分が大きい。また、教育学の原理系に近い科目だけでなく、教科教育や教育心理学の分野の授業についても目を向ける必要があるのではないだろうか（広島大学の教育学部の規模の大きさを生かして、他類の授業の見学等もできると、より一層教職課程に対する視野が広がると思う）。